

## 夜をつくる。

コピーライター加藤麻司

「昔、さかえていた」というイメージを分類してみた。「ひなびた」は、温泉や旅館によく使われる。静けさの中に人の気配があるとき、風情があって良いという印象もある。「さびれた」は、文字どおり、さびしい。時間が止まっている点は「ひなびた」と似ているが、お寺や工場などの広い場所に人が少ないときに使いたくなる。「すたれた」は、風化した感じ。ブームが過ぎ、放置されていることに哀しさを感じる。「レトロ」は、チャーミングな印象が加わる。価値が認められた古いもの。「かわいい」に近い感覚もあって、言葉としては軽い。大正、昭和の戦前、戦後など、どの時代を「レトロ」と呼ぶのかには年齢差があるかもしれない。「バブルの遺産」という言葉もこれに近い。バブル期を知る人は無駄遣いのシンボルという感覚だが、平成生まれの人は何それ？と思うだろう。「ひなびた」「さびれた」「すたれた」「レトロ」「バブルの遺産」。どの言葉も大谷の町にはピンとこない気がしている。

時が止まったことと感じさせる存在が地上に見あたらないからだろう。川が流れ、水田が広がり、岩肌が露出した山が見え、ところどころに石造りの立派な建物があるだけで、ここが石の町であることに気づかない人もいるにちがいない。土産物センターとバスターミナルといった高度経済成長期の観光スタイルがそのまま残ったような場所もない。70年代っぽいとか、バブル期っぽいとか、特定の年代を感じさせるものが少ないぶん、「昔、さかえていた」過去のイメージを自由にふくらますことができる。岩山と水田を眺めながら、石の採掘がはじまった江戸時代の頃の集落を描いてみたり、大谷地区の人の昔話に登場する高級外車や酔っ払った石工の姿を地図に置いてみたり、知識と想像の力によって過去と現在を行き来することができる。もちろん、そこに何か新しいものを造るということになれば、未来の風景に対して、現在の流行やスタイルを残しすぎてはいけないのではないかと考えてしまう。それらは、いずれ「さびれた」「ひなびた」ものへと風化してしまう可能性を持っている。

グラフィックデザイナーで、キギのワタナベさんは「目の前が、お花畑だったら見にきたい」と言った。同じくキギのウエハラさんは「ネオン」をつくりたいと言った。外はずでに暗かった記憶があるから、秋か、冬だったのだろう。陶芸作家の谷口先生のアトリエにお邪魔して、大谷の町で何をするか、何を始めるかを話し合った。なにを話したのか細部は忘れてしまったが、候補地が決まり、そこを起点にしましょうという輪郭が決まっ

たことは覚えている。陶芸作家や、グラフィックデザイナー、建築家の頭には、具体的なイメージや意匠が浮かんでいたのだろう。僕自身は、立体的な造形に疎く、頭の中でぼんやりと石切という言葉はきれいな響きだなあ、ネーミングに使ってみたいなあと勝手に思っていた。また JR グループの栃木キャンペーンという、県にとっては十数年に1回しか周ってこない観光プロモーションの中に、雑然とした採石場の跡地とか、お花畑とか、ネオンのサインとか、ささやかなものを紛れ込ませようとしていることが痛快だった。わざわざ訪れる主役の場所ではなくても、まわりの観光スポットを訪れた人が癒される場所、地域の人もくつろげる場所がいいね、みたいな感覚が自然に共有できているのが楽しかった。こういう話は、何時間話しても伝わらない人には伝わらないことが多い。

お花畑は実現に至らなかったが、採石場に無造作に積み上げられていた石は、建築家の手によって整然と並べられ、金色に塗られた鉄骨の柱に小さなネオンが灯った。事務所に使われていた小屋には谷口先生のアート作品が展示された。ISHIKIRI TERRACE と名付けられた、ささやかな空間は、土地の持ち主の方のご好意で、JR のプロモーション期間を過ぎても、映画の上映会をはじめ、手づくりでイベントが開催されることになった。残念なことに僕はまだ ISHIKIRI TERRACE のイベントに参加できていないが、大谷を度々訪れ、夕方から夜にかけて街道沿いに小さく灯るネオンを眺めては、三々五々、人が集まる姿を想像する。「昔、さかえていた」大谷が失ってしまったものは、夜ではないかと僕は思う。上機嫌の鼻歌が聞こえてきたり、音楽をかけながら恋人同士が過ごしたり、若者が喧嘩したり、夜のざわめきみたいなものが、大谷がさかえていた頃の町にはあったのではないか。テラスに灯る小さなネオンが、地域の人々を呼び込み、夜を過ごす楽しみが生まれ、大谷で眠り、朝を目覚めてみたいという希望が人々の心に自然なことのようにつくりだされていけば、これほど楽しいことはないと思う。

アートやデザインを活かした、大谷振興プロジェクトの話聞いたとき、思い浮かんだのはスペイン北部のバスク地方にあるビルバオという、かつては鉄鉱石の町としてさかえた町のことだった。ヨーロッパの石造りの街並みを縫うように走るトラムに乗っていると、突然、ガラスとチタニウムの巨大な塊のような美術館が現れる。都市計画の専門家に聞くと、将来、鉄鉱石の産出量が減り続けることを見越し、1990年代から約30年計画で、鉱山の町から観光とアートの町へと生まれ変わらせたのだそうだ。その市民の意識を変えるシンボルが、建築アートでもある美術館だったのだ。目に見えるアートの美しさ、明るさ、元気が町を変えていく。ISHIKIRI TERRACE の誕生の背景には、アートによって人々の心に活気を取り戻したいという思いと、その発想を実行に移した宇都宮市の大谷振興室のディレクションがあったことを最後に受け加えておきたい。